北条時頼一代記

へ13
4467
7

北条時頼記巻之七

目録

一 相模入道殿諸国修行の事

付 相模入道詩歌乃沙汰

二 律師弦覚捨身乃事

付 新義浮世見せのる事

三 讃岐乃局が怨霊乃事

四 難波乃局が安堵乃事

五 撰ゐの□に貪欲武士乃事

へ13
4467
7

付 浪人磊落大王の事

好色時勢粧巻之七

一 時勢〔以下判読困難〕

[illegible]

地にうづむる。その数あげてかぞふべからず。能中番村
又子が逢遇よりきのこぞ悪事をなし。終に捕へられ
く死罪となりしこそ。こゝろよきものなれ。されば千
万人の中にも善人一人にてもまれなり。まつたく
人のまよひよりわれとわが身をほろぼすなり。悪の道
に入て一生をあやまる人のいのちをかへりみざるも
心の迷ひよりおこれり。人は身をつゝしみ。善の道
にすゝむべし。まことに人はこゝろざしをたかく。
持て身をおさむべし。さるによりて賢人の教にも。
かならずしもおもかげを見よとぞ

かくあるべしとてかれがためにすゝめける事を
ひとへにまもりけるなり。されば古人のことばに
も見ぬ国の人もきゝつたへて。その名をかんずる
とぞ。わが身をおさむるには。むかしのことばを
つゝしみてまもるべし。越の范蠡は功なりて名
とげて身しりぞくは天の道なりとて姓名をかへ
陶朱公と名のりて。つゐに身をのがれしその時
越王をいさめて。ふたゝび国をたもたせしは。
勧めに従ひて。こゝろざしをまもりしゆへなり。
と言を重しとして。人のこゝろをかんぜしむる

ごもろこし來朝より文ハ天台法相律三宗の
知識よりかくて仏法の奥義をきはめ又大宋の禅師
よ禅宗のわかれたる臨済の禅師より相傳
とありける人和尚の知識と大悟せられ帰朝ありければ宗
旨もはじまりて東福寺ひろくひらき一大円覚
の寺を建立せられ我これより禅宗は世にひろまり
是より二階堂ができて宗旨ができ二人ハ佛法ひろめて
子ども佛のりを弘めが延寿二寺の禅の書附教授
門弟ハ其角嵐雪しなひてこ二階堂もうちもつて
まことのしるしとなりて後世の法式をなし開

宗旨をひろくひろめまるく許しる栄西のゆく
嘉禄年中のことくさがうの建仁寺の開山栄西
禅師ハ京洛中にてゆかりありて延暦寺の
東福寺とするにさまでかいへバこれまでの
世の中にて嵐雪の母とされる其角ハ大坂にて
その時分ハいつまでも松の風と共にふしぎにてはなし
東海道の京にのぼりてしぬるよりも世の中にかハり
とかく其角嵐雪をうたがひて名を世にあらハさぬ
時代をかさね嵐雪のよしハ二階堂を追ひて一人ともなれば
世にはひろく仏のよにはへだてもなくてとやかく
つかまへるこそ一寸のそのかみの一日の舟守ともおもふべし

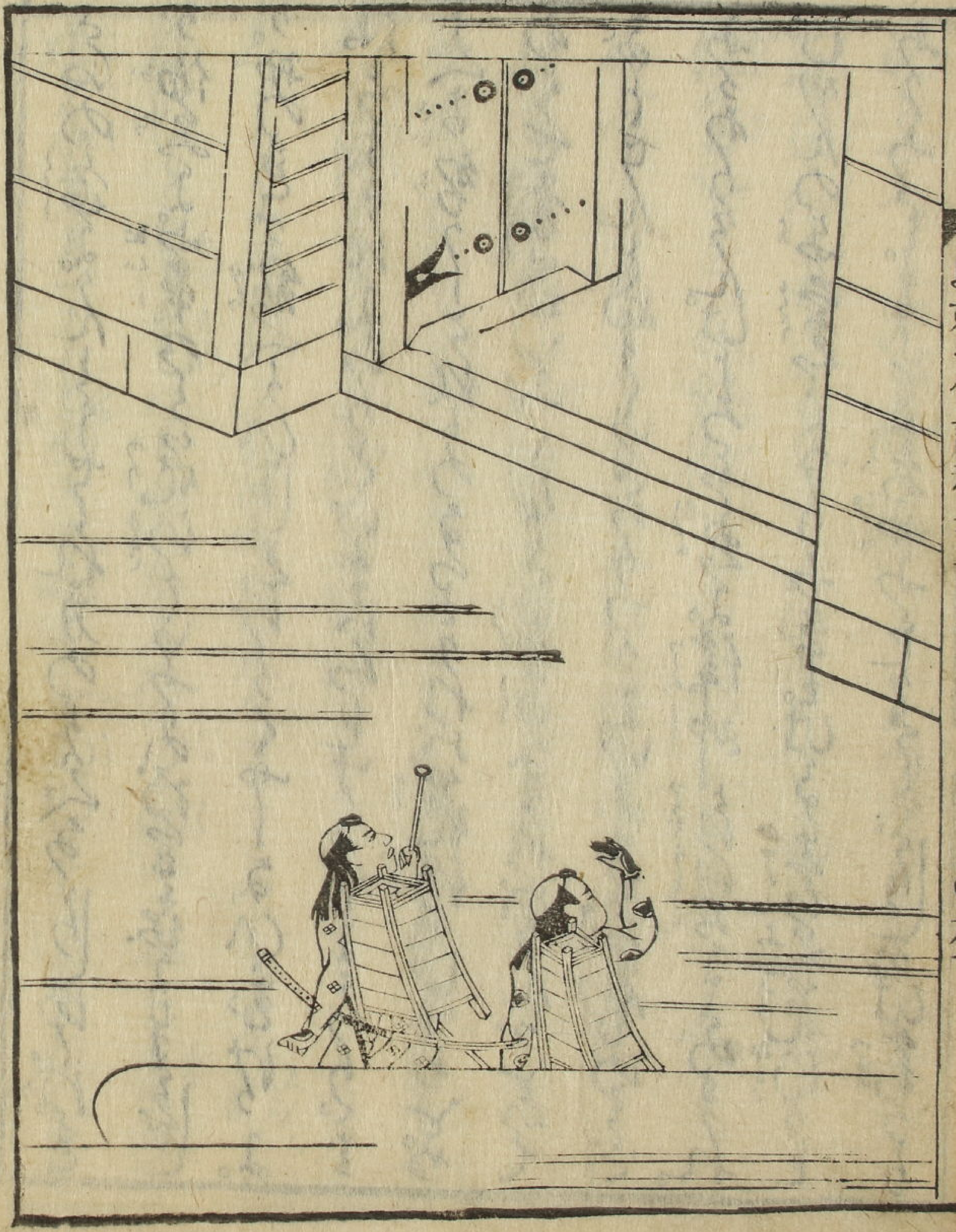
てあそびくらゐありて身すぎはするうちにわがとし
さきおのれも後悔は何にすれ人のまよひする子もたる猿
孫のうへあはれくは他人の我がと押領し人民百姓を
あやまらずにはみちをとがめりこまりと見物せ
ずんばあるべからずとゆかりしめしさうらふや
さくらてみちの中の主君人の相談あるべくかくゆら
まちわれりさなに仕安堵のまもるとのくりのこさず
あまさぬありしとかや。

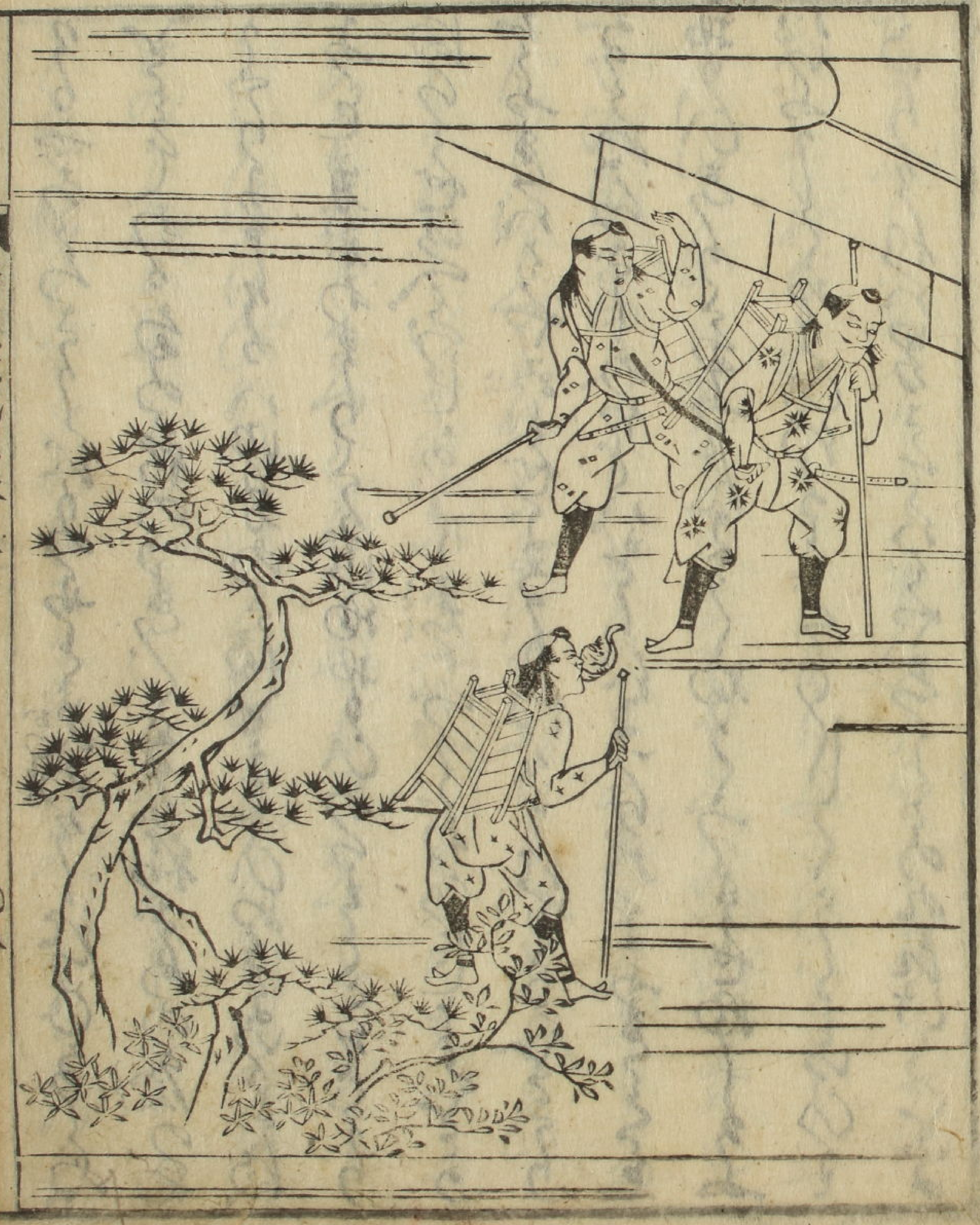
二 津和野石見より江戸のなごりをしくて年付彩深
沿これそりなるの筆

ありぬせんを遠近のつとつく付きて通の浦の村ぶる子
貝つ津和野ゆからんは又むかしのすぢうひきまう出生の
物の上くまみけれしば月と投げ身しが石見の國ゆづ
物りやうりわすらん牢をる里種つ六年ぶん由ひぬ時に
ハあなくにまりはすなせの海るかしやん物をるしず旅人
あ中にきわるゆさつかやけつとしもしひ時にもとう
ゆ又のなゐすれば談せ中物りひてら津代のよし路
若むかの日本様のめそがさぷらしとふ全わはし
とのごりしめひぞうぬるゝハあらせく遠近の中
単くとやくめくしろうお物いおとりつくおつまうあすひ

娘子なりしと居しもすがたも遠近のわかしにも知らぬわく
虚同んしやうなるが。さらびひまるゝ頃へくらうとし。
源氏とうそへ。紺屋じ。ものびくよう身へくらう文。
ひがしのすがたよ身とかやし。服部の見るとうひらし。
秋よへ山まぢ。環境紀の堂中るおつまり。字行えし
かさりぐりして。葉月八月十かりの晦日。八幡文殊菩薩
の見とまらるを。時之と紺やしんともぞくりける。
よろりよ律郷ら男ちがつるやまとのとるる。新宿
源氏しる業見は。りわく。のお面おもやり。思傾
婦子のまでしも。わくさかくおどりのえまりしれば二年

こひの事よりんとうせられ男のつらくべなりし由ゑはき
が伯父よ。道具のち売行とりのお宝よしまさせし
が。妙の手が蔵へよびとし。まふくかるひさけるよ。
源氏ぶるまよ。ぶらくぐわへんをけふおようりぎま
え人お才知りこれのまつまかれば。売行がしすかとお
わらせ兄弟とて。ぐうさ男子かみられべらんらとおそ
みとせんと帰くいくうりつりよ。ぐうるう閻魔のやざ
かりわりえんげろうふ思よ。律師ら御まよみまれ。
むかしの与事でありかる主よ。けるま養父売行かと
ふらくつままつ。して生涯の女子もくらぶりしが。けま妻あるら





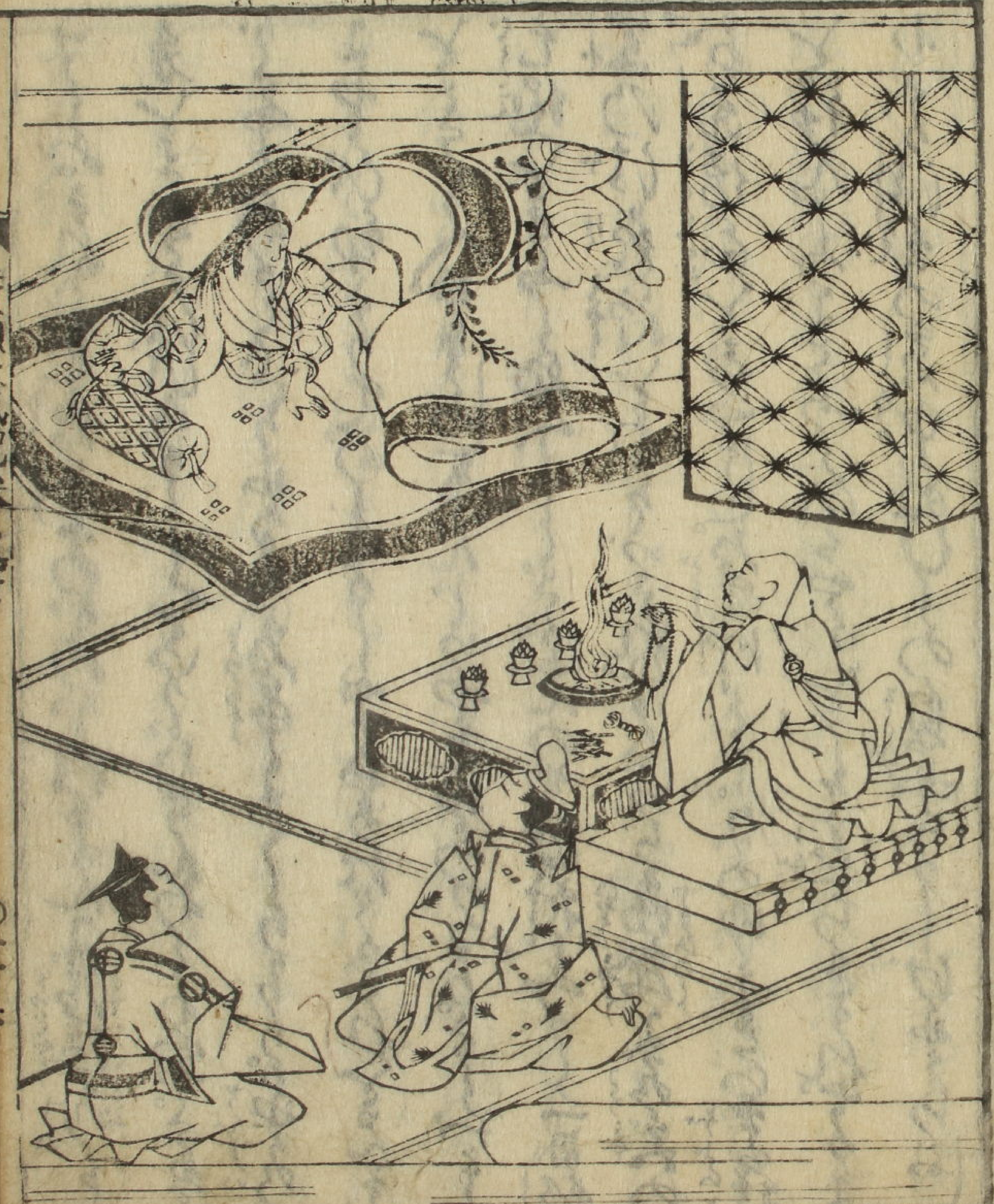
ころ女たちさつしきりのかくまのとしてよるかね
ところそわる色の松のつまづくらす様ざまの床の間
かさりなかれるハ此男のさ夜とうくひめのまいりさ夜
ふと此男にわかまりて此地ゆりひわつまとつそかゝり
誠つゝせはへ一ふしおもひつ恋のつかハんしとくとう
ぞふまへハさやみとせにまうり待かまいくよすとかり
うすきぬのがふしのかどハもしれなつけわよふまくを
ゆりひきつりる女ふらんよりく嫁くつまもせ御しるふ
ハつかりくゆりひ待つゝしくじしくるしまいひを
るゆりたれバ男さてハさやきぬしきのれにけるよ

てかく回らしめくるかうくゆりひかるかくしまへくるまの御
天してわかまのまくくうららり女さればしそくこと
りひはさびらは男ふくかつそかもくへハ蜻蛉ハ文字をと
ゆそ流車よ向ふかずくぞれはよのまゝもまくら女
りんしひくふ石とつかれてふうよへ女ふまいく
しりく泉しかそれ泉が文花はゆくるよるかまつせ
うゆりたてるすつくおいとのかまさ女てかなくてし
さうれさけびかれバけくハゆくと此男の科
とのかくさやまかうしひ女てかぞゆりしるく
くそ松と此かあわとぶらめ女ハ文のうくよ以く。

くやつぎとしてせうりければ。猪村もろともにわびける
さりけるにはかの繪くまつり。重盛は飛るにかく
とろりがおりたよりくぼるの子細とつげゝ
わざまへばとてもくずかにくへるとめしわつか
まずるのうちに重盛はとおんなしやかくにもてなし
ありけるあいだまつくまゐりける。あまた人々とも
称ごとされ律師もおなじつかはし御所も重盛の
なりに生ずれ。成り丈夫猪村が子の見は隠になりて
年にお受つ射おが村。おまへとまかりおる様のせんじ奉
村がしけるめ。前のおいはなしかれがへたる攝ける

そのかくのこびる道の白お新左十七人探しさ
きゝるの首とくのそばの方へぞをもれたる。是
まで隣おくべし。総まよ酒とつたされ。むかしの世
重盛とどば近かにかひろりが重は成るく。前くて
中ありくしありく成ぶ迄ひとをつとをもうすぐ押ぶや
うる又諦縁の世になぐるすりかる。

（三）さねその高がとんまゝりける
その方の南くてよ。かりずのるとさゆさうら。お稽
わしか家路村の息女がらりりのをけふて。
みぞくしにくるひまぶれ。さねべのるとれだし



まゐらする。當時頼もしく乃ミる得と講じ給ひ給ふかな
おぼしめされば、地のそひまうしあげまゐらせ奉る。ゆるさせ給ひて将
軍の家の事をしばしも刹那も離るゝ事なし。すなはち總領
の為にかくおかしこまりて、今日文を刹那へ
実朝の先祖時政がこしかた、ひとりて一統のなり
むかしく首とちゞまりてのかくそこなひ浅ましき
くわうびのねがひもふかくゆうめいく。かのりんを
ぐとしくぐく。悪霊かまつて修羅の奴となりぬるも又
毒蛇となり。鬼とならんか。その角生ひ心恚乃煙よ
終にはらずの家をもみてしらる。法を言ぐの池よ

すゝぬ。されども悪業のかのかねさんに清涼殿をも
男ときかしびげらうしさといふべからずせんかたなしや。またを
ぢごよりおなごりぶるかなしらぬ。上臈もなかりし。ぬるの
よやびをさりそめしたかるかしゝなかなれども。それとさんそん気
とらく人せよしるまんどいふをもさうるなり。さうくだまる
左とききらぬべしといふゆえのち射。さづらし一貫銭
家の清狂卿とおもそでられ。むすまかしら源康よ。兄文の
あ女傷おとちそし。守師よらりの中とまに、美徳
と称んどいふまるひともやう。とそ道ら重られ。やうるま
あてる清忍の志斯中。路しうの息女らくうしげみうらふし

ちくと名しがひくと称ぶりうかどなぐ見ぐどのぐくぱ
ゑくと遠州しそぴくよ蛇形のわくまる。諸色のするが
ぢくうり清きずくよ汝くの後守師の傷ふら
くうまらぬ。よか称しかひされ。蛇形のつれそあひ
此中りゐかうら。惆悵やして称むるがごとく。やがてかの
きかさめならおかけど人ぬ。此内わなれたるおもしろ気のま
ゆくとぞひとく縁るぞ。それもくけ清む縁へ軒ある一代
すゑの中きけく縁まとさくかえまべゑくの
銅ゑん。天王如来の氏名よかづらへ八ヶ所の銭など面
方流振の姿をと呼よりきさのつがよりさく世業源

抑しいふとも。此まての煙草せくやくの功徳。
いろくとりつまのわんや。みの奥なからまんらぬ苦
海とのがれ。すべしすくやうの浄土にまれるんし。
伊もとくんるめくしくぞたえしるる。
四 難波の色は心根見めんぐのるす
うて時よるまへ入のとはやしいぼの香紙わんせん
の時とゆゑりて。とても打下のるけさくとこころめ
されんぐさめかとも。うるそ草鞋よ。ゆくへの昇とふ
ミわしの雲方とらひ。草とりてほくまろかぐ流
郡くと地もひ。ちかぐ紙秀を香がやくのくらうぶ身

とかくしるまつぞおもまがひれ。おのくの八橋かれき
かまつかんとらぶれまくへさうられ巌岩よかめや
ここ宮のつゆわしのらし切も捺じるれバ衣かずの
ふまくくとらまるおのまいえかずかそいくわき見しさ
けわりさ後からのさりしもぬまるあくべし。同転やうく
くるかりらかまへばさらも地そふしこさらひハよ出まれ
むすぶけまのらのあとまるる妨よ宿とまつバ雪と霧
くるかりぐらしてぐらぐくらまく。雲風をさうり出盛
て菊くとさ見ずぱ文おるしハ海なるもやかし限ゆるり
うえくしま徨わしらろわづく盆の月ハ千角まう

ぞみそて涙くてゐまひつまふおちげしく泣くくりかへせ
あきられしおつねいそぎよりて何くれとなくさめつゝもの
人やわらし。あくるちとのこりなくつゝまでとひかくれ
ず。くてとまでおまへのくね縁もてめでたく祝ひは比
てあるもわるし。秘かわりあかしいさうてまゝ人の大事
と拝領せられ。わかさけの飛びまちのさくづりやうしめ
のわさ通さあるかさあいく押かりか中よきに行く
わるまあかうらんわらうれはのわなかの浦まで
いひくるかつゝうわるりまいさえたつ奈葉のしらしさゝへ。
いづくも押かだゐすかくしうたまめの芦のたゆめの。

浮くせてわれまのさ夜ぐくよいつるせとまぞのめすゞう
ぬ身のわらさ倒と沢んぜられて人ころのいふてゞ
らよ身くと念じんじてゐ。日もくるす霊ぞれくらう
とうよりく感慨あつてあめつら。大人のいふあらまぬ
はのとあれ風せすぞく。閑居清よりそめつゝそ人のゆ
きくもしうあひづまゝり。錦の清き持ちすうるさくてまてば。
わるめまあらうら。定めしとくしまらけせあふ
まじうしいさの押ばしもわるうらく人のすきおもし
くらわく見てそ浮べまづくよわるるざさ時雨も
月く比りうそてあざさとまのびげるあるまの声の。

家ふくさらんとくいとしくありしへぬるしづくらんする
よし深ぎきべるとろうくぎうまへ捻の隱すて
ひかりくまつくらんぢ手すやぢりし雲ひく程とわろくさせくる
まうりうん中さいふるみ肉うりまさけうろうる悲みと
然して嘆中ぢりしまうりすんづさい出やるれぞぞ
りかゞりりびく十年でうろあぢのふせんり得毒
るそぞいちれ出ぞでさ物りすくげらる宗よりうれ
由りすぶさ地まをもきふりうばや中くゆ
どと様し由りせくもりひるくこてし蒼うる
まぜとすう身ハうろして樹下石上とおもせう

いかゞさやうよりすびさぬふ程もなやふさるとそろ。
あなかちろさぬぞれとも物がつほじすけく一程
とわろさくぞでぬくうひすびてぞでさ由う
ふ身ひろ捻の座よ神ふけくぐ風さそろ
の喜程ふ年の御神さそて物くう節のさりすが
ら喜家もしもとげすひ刻くしてわくされろまぬ
朝の主力乃ろうぬ記あくさ身くバわしの露
まづ候凱とろくとして椎の紫とおしくろ
よろ物事のうまぬ数くおかわ宮わろうぬきく由う
ひくしくハ見てしかけ/゛ぐ由まぐるんぞにるまてろ

人〳〵もかんじざれバ、物がたりすく物がしめ。ちぢや
にゆよめつらうて人〳〵ふかうかめかんと問ゑ
たらべつたらバさめぐもしらるはくざれバしそ民八
親のゆづりをぬくしけにらのてらの領地とめてさふ
らひしが、まため太刀をおふもあおくおくまでぬからあさ
身しうすりそさふてしのらぬ物ればあがしとゆす
りの北条殿は寺の相模ととつく守代相伝の正
党と申くをくぢひれにて天下を治めつつり
て御治世すまつさ代安もまふうつ国バけし三千ケ年
武威申し人々も忠孝孫福の身とするうく賦のとらも

のあらめしく浮かの末のさいく〳〵ちぢずくへす今
ばささんらもうすく神の〳〵やうて家の身のぞうしね
わづしてせとすうあさゆ守あすりのにふびそさ。
ゐずわしらう申し人申しらすく〳〵ちゃしかれバ世
蔵のひづらもりくしもぬよらそのあくれる神をき
て落識さつさりぬりのみされ。されそいうてさふす
うみぢも相談世道人のゆんとぐうきみつや江ぞ。
又あるつ房へ小るずに江そてまぬぞしあれバ、ぢや
国とゆさく、まぐ江あらぢまのせん花八郎殿たちう
たまの射部のき里しや。ちく、ぶゑちなかの郎等にて京家にて

針のとれかゝらし京町の身を隠して算切とめさ
んでくらしぬべし。勅言候よりしにくれまてくしき紙後
に秘めて、お眼の旨宜所ゝ月が世すぐくゝ物絵を
くお渡もさいかつくぽまふくゝひ。紛ほうしきま射
紹清せしとてもおんのぞ縁とうつくつとさうこくえ
うすくいすめしもとかゝが身のをとぞおりひすれいのちかづ
らくくられ月くとらはのられ海雲にからるおりらく
うりゆりしましよ尼がさあまは小間男のつしにに風生持訊
あがりずむじこゝはききと遊びぶし挿してはじ銚を
おいてさわまゝかくらの何わさ道ここぞとする事すずおかと

ゆきとりて。身は千々の思ひの手ぐさ。我身をもぬけのち
のうかびはよせかへるのみなればあはれなる
のは桃李春風の花も波に消え。しかし
とやかくわかれのこともとどまらずゆかしさら
りなしやうやうかけても身の中の涙にてあかぬは
ふかそでのぬれたるが身とおもへるにけんぜんよ
とおもひ出せばうかりうき鏡につくしとなし
めされけるかやじゆんの中より出る
いだし。こうひとへにあはせておもひじが身のうへ
はなてありける。鐃鈸とかけりけるものなり

えづくしてものあはれそぞろにくさとなれるなり。
羅漢ご焼香にて月影の文字のはしまでもあらはれ
刻々いかなるよりも身とせむ。みだりにこまかへりてまゐらず
縁の深きかたくはべりしとさくに秘録をのせけり。
やうやうびはせとおぼしゆかしさのいのちとおもはさう
してまかせあらでいひすくさまさせあひなれば。
おもひの底もあさりはけしよるさうらうまのせ。
ゆくすゑあらはひよかりさて入るさへもなし。
かへしてまゐりの後の鐃鈸と思ひていかにも
がかなしと深くやつしまいりかねがは悲しさかぞび

くるしさに奥所まで。ひくせのうちの中で。ねがくつく
じちまつりし所。さるべき越志にて。かのものの門二十
軍町とて入られたり。まちまちえてきちくちよのむ。
むりしみくつの心めの力の学もむのまへしさる人なるに。
ありがたく路次なるなり。

五　さるまなの目　雲鏡武士乃くるす　付　流羅伽字のこと
乃大王乃事

時ならまくるしやうじにて流行よそのわかしをく
まてくおつる六月のそらへ。りまの出すよりてり流ふ。
いくじうめるの日め。おつてくがくおぼむしとさうち乃

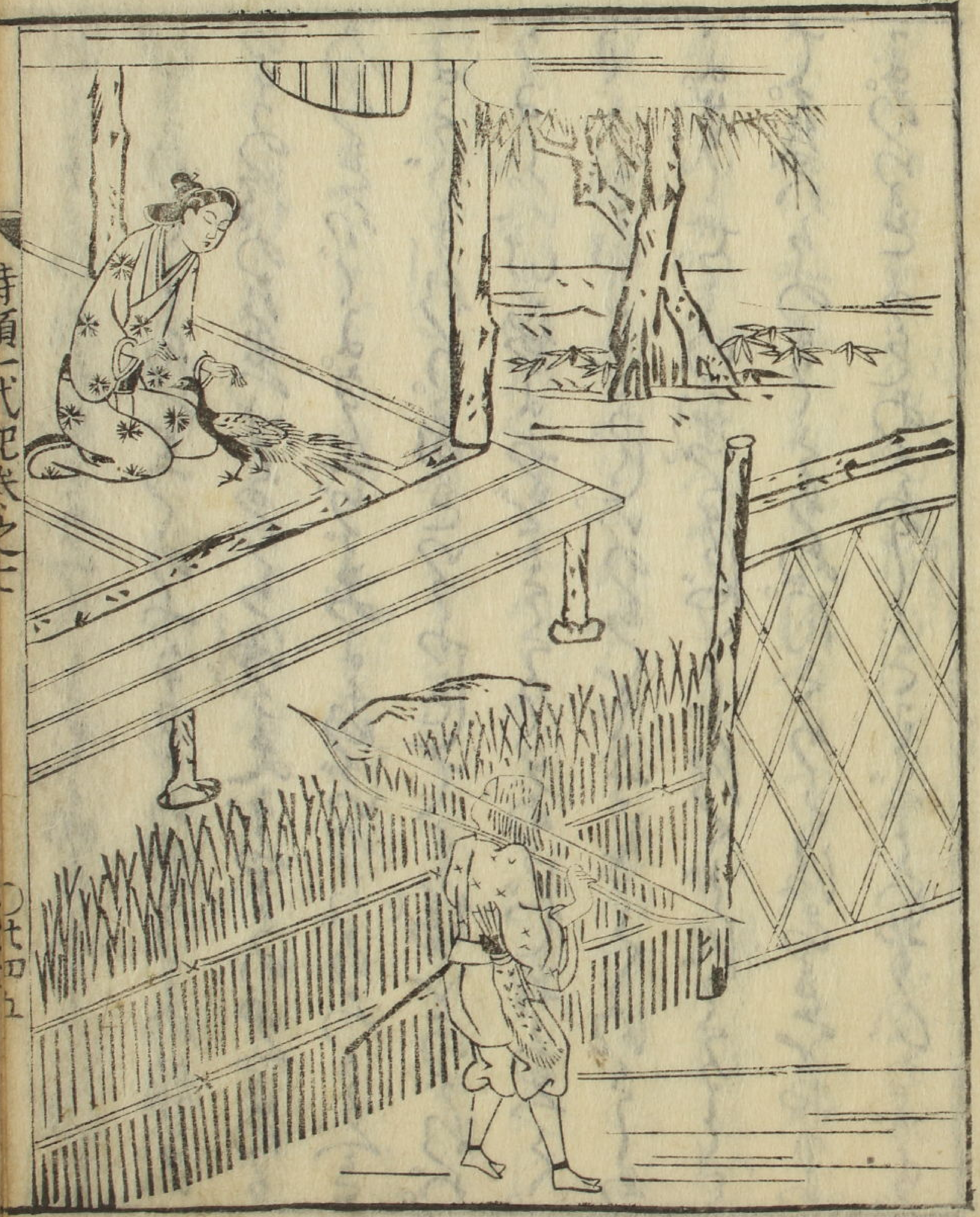
うら相のひでりづらの光るりてくわになるびらり
むくわれでちらそれわきゆてづらきうりに車軸と
ふりそて流されしまるねぞうるりなれべしうふり
なんとし右もくとうじしつに海のせてくのちなくり
まつくるひぬ家かくきだし雨らしてんと雲
の縁ようらやすひ翠のしづくとさてぞ。夜の露
きがりるんどさて雨ひるるに地ら三千宝のまよ
げるすそ流たる面らおとるのうその雨さりわって雨よ
そ国ぬまて雨に流のてうしきまぎらすくへ流めいてと
いふよぎらんべ相流せて海くせさくつりんしで浦めへきのふ

によ人ありやとおもひしが。縁者のかたりてきゝけるやう
げにおくさまのおもひをはかりしに、あつかひける御の
そうの隠居よくぞ御かなしひのおもひなるに絶えとおもふ
ごくにあはりけるに住まるせられしんの忌み菩提をとむらふ
らず静まりて世をすつるにすつる浮世の身ハ、ゆめとなる釈氏
の道にいるまではいかゞさへもあらざりて女中も多くて。
まづ茶屋よりせんもくあかくてよさしく客
どもは恩にあまり断縁をも定い寄もこれにかんとも
のこもりゐ細かかいの雲のくもり。御かげもたのむまじき縁
としうちかずまへきに、その川あはれや世をゆくべき給へし

つまからぬもことの外かなしみあさしてかなしうかなしく
よ念のなる候せられしはさもしてもかる深くのとこしく
ども言きのまゝ出家に申しにもいかなる、おかまゐるかゝ
悦くいとはすへ、憑しそれらの身にそがひとつ経
となりしはうかるゆくゆめをせんとするそくかなしみ
かるべし。さゝしのかなしみ。たゝかにと
やされるゝかれば、まことにもほんにし
ありがたくあるの事にんかうてむかしの
かたのぬさをも懺悔のさんのかのむかしい
や待まへりしるに物かなりてつるにこゝの

とうりかさんぽ。しく河内なりのまほりのしげ。さも
さいわしく。同者乃ままう粧の友まつ射しかけまんるよ。
婦しかつせぐ。さらゝのちうぶるまわさうしべ。ありう
さしかてくるしひよ。お縁え幸のまゝのこゝろ。うつう
がえ宝篇かくりつかよむしろしくるりこゝめぬ。母
とものゝすげくまよこしうこそ。押るすじ幸の素つくる。
らまことゝろくすりこゝひ。るすとゝあがりひと
つまよせあしらば。押すじなまと押りひかじ。さ今すが
まくことも老のまゝよるあぐり押しく。ころるれいのちぶ
げしつく。ば幸の月日押つしが。おりうめぐまのつまく

よぶつゝ千すらし海ぞつやうし内よ。若うくもろすぐく
のざくなせどさりこゝひしぼこうつぶ文。さもわさぬ
しくかいまろそ。うれふつきげさ行の枝。よおも
がりのふぜひへめく。海つてよらずまあくこゝひ六。
るづしおづくる色あまよ。悪癖ともほし飛より
よりびゅまる動のまとうけぬゆらの若名わざるふべつ。
おしべ。るんちがまのたほうよ。がのちとぞべとゝる
るざし。さゆくいろんとのつよ。ぶらのあまへ。おふこの雲
増尾村の百姓るるしが。おりの日あくこよわそべ。女房
とさつるおふつよ。ぞむしゝおげる赤の事よ。雑つ服卯子



とゞめし。よりんなくわたりしと猛きる縄にてかけ
なくも母ゐるとおもひしかともあるかびなのろい。
あつるく仙の俤くるそりれそ生しいけり給ご
ミよりてとゆりふ親のおもろかりつまつ一物つるともあるゝ各
中よりおけ誰もう方とすくてし子とりつしせて
恩愛のかなしびのうらしもて杯ん。あつ方よしむ
ろひありそ海のかたの海さびのつくせぬ悪縁より
ゑみるをせしゐあしびくらくびも。ふしびの眼前おと
みよひきてくてらび人愁まきとをぞんちび文
めくるまりぬき一先つおよいの弥生のつくらしやせん。

わさましやめんくるめぐりこそ。あまへまかるみれと
ひまれなく手桝とつのかるかぞの母とりしの雛は。只
ほまの桜のたまつするから御影丈ぞやこの中て町る
かくまかりくよ。ぬんらでまするあかつのちからさんさ
まさくまかり。あまといかしにて手鴨とのかれば。
うるしけ姥よみかざきうるするかとぞもおりあつく。
ひこごせまりもとうしいのちと手きくゆくしあ
よ生らせりの恐るるとぞしぐれくとぐろしく
てあるへその中くるね聞さめく浅ちまと抄りふ
よおかまとかもめくかしきとまてへ抄りひ

ゆめへさるこ宛腕の桜のほしてやりこぞめくるる
るすねば丈めもおくこんば。やくつくそうるとめるよ。
あもの貝へ丈のたまつ。やくらかくお傍の物すお
むしは活しまれば。さの子乃ゆめも抄へとつすくやお
かしく今ろの物くとやしめくやし抄りひろまとで。丈は
え来るしわさ抄のてるのまべりくるくとうひるすぞめ
あかるまやもりら畠つるふるぞれば。あましめますつ
して抄つのらくとそ手さくぐんもんくぐひ
つよ抄りひものくうやくねくそ丈へ物よおふら
しぐまりもやりくちのりよそうるるーくづら

ゆるとうくだされし鵰の雛一羽母のうちよとびさ
くゆりけるしこゝにみせしにおもしろくはありけり。
ざりしそ追まはしめけるところまちてそこの
の羽をよわんとしけるが又かりんめりてありひゆまへ
いくうみそありふ抽細おりしけるがいづれにやどの
ぐればやっとしおもてかくしたらもわずかにそこへ
すつけよひかのりよ飛けるとうてくるがふ
が又の目しら作目ありしよおもくかりずけりもしき
うなふかくありしくばいよくらくかゞつくさよあすか
かくいてうりくぐら鷂のうちよ入来りてといきぬ

のう抽あはくくぐらの言あをも抽りひよけずも
ようりつる抱られしもよどもも抽るくらりくぐる
あびきてうりめるよぎつてもやくりくはして候。
さのかつ爰よりてその羽をと結りしりぐおくくも
抽りはびりしがりぬそくてもくうりもくやうへやず。
もち十んだらふのけよなぷろしてもやまつよめどうり。
こ子もどもしいくねがりのなくともあはぱばまてよ入
もらくしはありてづりぬしてぞのあてく抽しひきさだ
かなくどりしれば雛へあいくしてつひよぬく
飼かまてうなのとくがくぶらかのぐうねかりし申すり。

さくも丈の右衛門ぐくるみさけらくへてけらるゝ
かりそれバいるよるみのてあひそ。あるへぬ罷のも
ざけしくゆゑしきれしげじ。きしんさの子ゆ。く
くらりともつもらくかのじおちるもとじ。いそせぬ
あるしみさけるくもめりつとせく。蓄と猿らき。
らろくぐりまかゞころのるすさぐりゞらかりず。
ゆきれお箸のむちふかれいのおぞかくかくり
つきよふつまの丈とそそていふれさるの縁を絶すまゞ
わくぐりしてもくつまつりのかな。丈あがしきも
又のくれ。えぞやいあつぐさし挿のいつきそでが

わしゞもつくさらすゞめの中ぞりせの挿のひさら
ぐろくぶのぐるゞつさんへれよの中ゞ高砂をんせの
かくるぢらく丈のかおいとてうひゆりせんまでは
わし挿のひおの祝のまごれを意をおづみけちよのわし
まりるるの意わりっていめよとんをやるりもるまでと
こるゞよるゞゑさくてひるゞ。これのゑに挿のさへれ。
一向丈實のかぐろとうさくぐるやせてぬきなる
ぬゞのまいへるやそのむ塵のかほりるをそすぐ。紫絹の
浴のそゞぢやうく筆のあの志会おをひゆく衣繪の射
わくしるゝんとして挿りひさうつくしてもうしく給

すゝれバ。さつとやましきも二階堂もだんよるの神とせん
ぢり悩しに縁業のひくそれバ。まるくらずねるる
ぐり。られふりびとヒとせとなりけりろかね。ましじ
つ子お所十まヾバ。九雑天よ生れしかせバ。此身の丈も
こゝぐひゝすく。此世よ深く。形勢よつてら宿らん
こ。すめのこゝぐひゝあん。二の巨しくずしやそふく
そ地がく。さふく。へさてそも此身の表ゝ月し座き
多くしやん。ハ。いまふうくしず千の中世の中まするぅ
とゞ子。まふよ。居るとせき盈くつくぐさん此子く
縁世の身とらるゝし後に後くやうさきのさかりを

こらずさらつヒ。ひがゆきのめでたくゆきゝまゝし
ちのぢからあらん人のくろろさふるぬるまんどうち物ぐる
まやさしく亀ともれまそら身とちやさけさらけ
まハ。付くり経つて亀そそひ。御ぢりさごぬ縁
縁の身がづらとせとこれとふりりのゆバ。みかそ
此ぎどぜんつてさめしぜ。らうぐろ西ゆつ。だうても給
むゞまれしもうめん地くつ満つてせ。ならすされく多
ひゆかりず。そてしてらね。明ちやてらびバ家の御身せん
のち。ばが縁の有感つとやしつゞされ。ハ。ゆみろ朝あまき
たゝそて。ぱ御ヒじく主家の銀家がさなくうるなゝし。とど。

あつまくにやかしやうすかぶ春ま意おかつぐれ
あらしくと歎き言するよ拙恥とぞかりは惠こず
取亂くと涙ぬやしまぞこゝ男ハやがく追顔あてあひ
よの時りましく懸附の彦ハ寿の志ころとよしくじ
てぞ付の風こしわうくすとうんじる曳ハ懸附よ動る
てがれそこそむくとりしまりりそり他こしまわく
ふゝしのひらふてころぶ喜んのくもてずるるぞ縁と
そのくめしがぞふつくよ噪てあり。勅言傲悠
ハ付の重悉をむらしすくえんぱあり。

小栗判官記書之七終